

巻頭言

「協同」の転換点 — つながりの喪失か、協同の再構築か? —

大高 研道 (明治大学教授 / 協同総研副理事長)

2020年6月27日、協同総合研究所(協同総研)の第30回総会が開催された。30回目の総会は、長年にわたるワークズの実践の苦労と努力とともにあった協同総研の歴史に思いを馳せるとともに、労働者協同組合法案の衆議院への提出、そしてコロナ禍という戦後以来ともいえるすべての国民(世界中のすべての人びと)を巻き込む惨禍に直面している私たちにとって特別な意味を持ったものだったように思う。

私がワークズ(労協)のことを初めて知ったきっかけは、本誌『協同の発見』が創刊した1991年9月から遡ること5年前の1986年に労協連の前身である中高年雇用・福祉事業団(労働者協同組合)全国連合会が発行していた『仕事の発見』誌であった。まだ高校生であった私は自宅にあった『仕事の発見』創刊号の頁をパラパラとめくり、そこから伝わってくる「熱気」に圧倒された。30数年経った今、自身のライフワークの重要な一部を占めることになるとは、もちろん当時は想像もしていなかった。偶然なのか必然的な出会いだったのかはともかく、つながりの連続性の中で今の自分がいることを実感している。

コロナ禍によって「自粛」、「ソーシャル・ディスタンス」、そして「新しい生活様式」といった用語とともに、我われは行動様式の変化を求められている。それらは互いをおもんぱかる距離や行為として流布しているが、無言の同化圧力をもなった行動統御としての性質も併せ持っていることには留意が必要であろう。ハンナ・アーレントは全体主義と密接な関係にある「嘘の世界」について論じた(『全体主義の起源』)。アーレントの全体主義への警告をふまえれば、「嘘の世界」とは自分たちにとって不都合な真実を見ないようにする人間の心的態度によって生まれる。私は、そこには時代に蔓延する「正しさ」も同居してはいないかを感じている。自らの行為の愚かさにも無自覚的な自粛警察やマスクをしていない人への暴力という「正しさ」に対して「おかしい」と言えない空気は、一方で「良識」という仮面をかぶった自己責任論を人びとの心に埋め込み、他方で、時代にへばりついた「正しさ」の暴走を助長する。

このような動きは、協同組合が大切にしてきた協同の精神を考える上でも決して無関係ではない。この間、協同組合関

係者からは、つながることに大切な価値をおいてきた協同組合のアイデンティティを危ぶむ声がかされる。たしかに、組合員同士がつながり、そのつながりを地域の支え合いや助け合いへと広げることを通して事業や運動を積み上げてきた協同組合にとって、直接的なコミュニケーションやふれあいは一つの生命線であることは多言を要しない。しかしながら、これまで私たちは、その根底にある協同の精神とは何だったのか、その本質に立ち返り考え、話し合い、共有する努力を十分にやってきただろうか。私見を述べれば、その根底にあるのは、もっとも困難な状態にある人びとへのまなざしであり、問題を個人で抱え込まない社会の創造ではなかったのか。安心して住みつづけられる／生きられる社会を個人の自助努力ではなく、自立と助け合いを基盤とした相互自助の力で創り上げていくことだったのではないか。いま、その基盤自体が、新しい生活様式の「圧」によって脅かされているように感じられてならない。

本号の2つの特集である厚労省委託調査「被保護者に対する就労支援時のアセスメントに関する調査研究」で対象とした就労支援とコロナ禍下における自立支援の現場で出会った人びとは、おそらくその多くが経済の調整弁として位置づけられ、真っ先に困難に直面する人びとであることは想像に難くない。彼ら彼女らは、様々な資源へのアクセスが制限され、複合的な困難に直面し、将来への見通し

を持たない状態におかれている。私自身、前者の調査に関わり、後者については6月号の利根川報告で紹介されている「いたばし生活仕事サポートセンター」(いたサポ)を訪問させていただいた(2020年6月10日)。「いたサポ」では、コロナ禍によって当事者(被支援者)のみならず、支援者である組合員も体力的・精神的に限界状況のなかで必死に当事者とともに問題に対峙している姿が強く印象に残っている。そのなかで、ある組合員は支援者としての立ち位置の変化のみならず新たな(協同)労働観を獲得しつつあると語ってくれた。たとえば、団会議はワーカーズの組合員民主主義を実質化する重要な場であるが、夜遅くまでの作業が何日も続く中で団会議をやっている余裕はない。しかし、話し合いがなかったわけではない。多様な問題を抱えてやってくる相談者に対応するためには、「(組合員同士で)話さないとやっていけない」のだ。そして、これらの経験を通して、自立支援のみならず、協同労働の協同組合としてのワーカーズが自立支援事業を行っていることの意味をあらためて考えるようになったという。

このようにしてみれば、協同とは単なるコミュニケーションを意味するものではないことがわかる。不都合な真実から目を逸らさず、互いの違いや意見対立を乗り越えて共通の課題に取り組んだ経験を基盤として、そこで生成された協同性を持続的な集合的記憶として実践に根づ

かせ、地域へ広げていく営みの中にこそ協同組合がこの世の中に存在する意味がある。

パットナムは、私的所有を前提とした等価交換・同時交換を意味する「均衡的互酬性」に対して、間接的・長期的な観点から人びとに便益をもたらす期待を伴う交換の持続的関係を「一般的互酬性」といった(『哲学する民主主義』)。ここでいう「交換」を貨幣的な側面に限定せず、期待の伴う助け合いの持続的関係として捉えれば、我われが大切にしてきた協同

が有する本来的な価値と姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。

協同とは、ある特定の時空のつながりだけを意味しない。他者の困難への想像力を伴った助け合いの経験の持続的関係の蓄積こそが協同組合の築き上げてきた大切な財産である。そして、その協同蓄積がどのように機能しているのか、どのように生かすのかをともに考え続ける営みがあってこそ、未来の協同(組合)の展望が描けるものと思われる。